

美術にとって「読み」とは何か

シンポジウム発表概要

芸術系教育講座 福本謹一



美術の領域において、「読み」ということはそれほどなじみにくいものではない。むしろ、積極的に「読み」という行為を期待されているといえよう。しかし、実際には「読み」という言葉に違和感を感じるのも確かである。

今、仮想の美術館を訪れたことを想定してみよう。登場人物は美術の専門的知識をあまり持ち合わせない「ワタシ」である。その美術館は正面にギリシャ神話の神々が集うペディメント（正面小壁）をもち、ドリス式柱頭に支えられた神殿風の巨大な建築物で、入り口まで30数段の階段がある。この階段を上りながらそれが茶室のにじり口のように異空間に誘うとともに気持ちを引き締める作用をすることに気づいた。赤みを帯びた大理石の壁に反響する靴音に心地よく包まれながら、「ワタシ」は目的意識を確認していた。「芸術作品を見に行くのだ」と。そう、「見に行くのだ。美術館のホールに入ればインフォメーションで館内図を受け取り、目的の作品のある部屋へ直行することもあれば、ただ足のおもむくままに「芸術」の匂いを嗅いで行くこともある。いずれにせよ、それは芸術作品をまず「見る」ことを前提としているのであって、「読み」に行くと考える人はごくまれなはずだ。しかし、この「見る」ことにはアリゾナのペインテッド・デザートのような意味の折り重なりがある。

館内のある部屋の絵の前で足が止まった。眼を細めて題名のプレートを見やれば、「アルノルフィニ夫妻の肖像」、ヤン・ファン・アイク、1434年制作とある。15世紀の北方ルネサンスを代表するオランダ画家のどことなく不可思議な雰囲気のある絵を眼の前にして、疑問符がカタカタと音をたてて頭のなかを駆け巡る。それに合わせて、視線が複雑な軌跡を描いていく。突然、かたわらに姉妹と思われる女の子が二人駆け寄ってきて、4歳くらいの妹が「変な男の人がいる。女の人だ。犬もいる」と言うと、6、7歳ぐらいの姉のほうは「壁に丸い鏡がある。床に靴が脱いであるよ」と言ったかと思うとすぐに隣の部屋に消えてしまった。黒い毛皮に包まれた男が緑色のスカートを腹部に持ち上げ、まるで妊娠しているかのような様子である。二人の足元には犬が描かれている。後ろから男の先生に引率された小学生の高学年らしい一団が来た。後退りした後に絵の前に群がった子どもたちの声が入り乱



れる。「手をつないでいるよ。恋人かな?」「窓のそばにみかんがあるよ」「違うよ。リンゴだよ」「鏡にたくさん人が映っているよ」「ホントだ」「毛皮を着ているから、お金持ちなんだよ、きっと」……。さきほどの妹の方は描かれた対象の直接的な指示内容を列挙していただけたのに対して、姉のほうは「壁」と「鏡」、「床」と「靴」というようにものとの関係性を認識しており、高学年の子どもたちは形態の奥にある意味を読み取ろうとしていた。

しばらくして、小学生の一团に代わってキュレイトー（学芸員）が数人の来館者とともに絵の前に現われた。少しばかり前屈みのその学芸員はスコットランド訛の低い声でうなずくようにして、解説を始めた。「男の人はオランダの新興商人のアルノルフィニで、左手を上げて結婚の誓をたてています。左手を上げていることは一代限りの相続を意味しており、この女性が身分の低い出であることを示唆しています。天井から吊下がったシャンデリアの一本のろうそくに灯された火はキリストの祝福を、窓からの光も同じく神の守護を意味しています。窓辺のリンゴは、人間の原罪の象徴であり、愛の厳粛さを求めているのです……。足元の犬は忠誠や従順を意味するもので、神と人間の間の契約や夫婦間の信頼関係を再確認させていると言えます……。」彼の説明を聞きながら、当時においては、こうした絵の中に潜む寓意をある程度「読む」ことを可能とするリテラシーが存在していたに違いないと感じた。そして現在からその時代の絵をレトロスペクティブに眺めようとするれば、イコノグラフィーといった「解説」の方法論を要請する。絵を「見る」裏には「読む」ことの二重性が含まれているのだ。すなわち当時に置いては「読める」ものであったものが、絵を「読み解く」いわば「絵解きの快楽」をもたらしてくれるものとして存在しているのである。このように絵が「読まれる」ものであることをある程度必然としていた時代は長かったようだ。

しかし、その読みの普遍性は次第に薄らいでいく。北方ルネサンスの部屋をあとにしていくつか部屋を抜けると印象派・後期印象派の部屋につながる。ここでは、ジョルジュ・スーラの「グランドジャット島の日曜日の午後」に出会うとしよう。「点描画」と言えば誰もが納得するその絵は、スーラが1886年に完成させた大作（207.6×308cm）で、穏やかな初夏の光に満ち溢れる風景に、こちらも一緒に足を伸ばしたくなるような雰囲気のある絵である。この絵でスーラは点描という造形的実験、すなわち、パレットでの混色をやめて、原色をキャンバス上で並置し、鑑賞者の眼のなかで混色をさせるという試みを行った。この時代には画家は個々の形態のコード的な表現からすっかり解放されていた。グランドジャットの前年に描いた作品に「アニエールの水浴」というのがある。その作品でも、人々が川べりで憩う姿が描かれている。そこに描かれた人々は、実は、同じセーヌの川べりで裸になって水浴を楽しむ労働者である。アニエールというパリ郊外の工場地区で働く人々の余暇の姿がそこにある。構図的に対置するだけでなく、これら2点の作品は地理的にもセーヌ川をはさんだ対岸に位置するのである。「アニエールの水浴」の人々は右向き、すなわちグランドジャット島を向いており、グランドジャット島のブルジョワたちは、左向きになってアニエールを見渡している。そのことによって、「グランドジャット」はセー

ヌ川の中洲にあるグランドジャット島で憩うブルジョワジーの人々を揶揄して描いたものと言われる。その絵は、「アニエールの水浴」と比較することで、より当時の社会、風俗、時代へ、ときめきながら迫ることができるのだ。このような芸術家のメッセージが何かといったイコノジカルな「読み」と同時に、色彩理論や光学理論に基づく造形上の実験的な試みという側面も浮かび上がってくる。そこには作品を「読む」ための約束事はすでに失われていることに「ワタシ」は気づいた。こうして芸術を読むための普遍言語が個人言語によって淘汰されていくのである。

「20世紀の美術」の部屋に進むと、こうしたメッセージの個別化はますます進んでいくことを知らされる。

アンドリュウ・ワイエスの「1946年の冬」という絵では、飛行帽をかぶった少年が丘を駆け下りていく様子が描かれている。透明な孤独感がひたひたと押し寄せてくるような感覚にとらわれながらその絵をじっと見据えていた。しかし、このときはただ「見る」だけでその丘の意味を知り得ることもなく「ワタシ」はある種の傍観者として通り過ぎていった。



この絵を「見直す」ことはワイエス自身の言葉を追った数年先のことになる。

「一人の少年が、強い冬の陽光を受けほとんど丘を転げ落ちるようにして走っている絵です。片手を広く泳がせながら、そして黒い影が少年のあとを追って駆けている。ところどころに残雪。そしてあらゆるものとのつながりが断たれてしまったという私の気持ち。それは途方に暮れている私でした。空にただようあの片手は私の魂でした。何かをつかもうとまさぐっている。その丘の反対側の彼方には父が殺された場所がありました。私は父の絵を一枚も描いておかなかったことを悔やみました。とうとう丘そのものが彼の肖像になってしまった。」

Wanda M. Corn ed., *The Art of Andrew Wyeth*, New York Graphic Society, 1973, p.58.

その絵の隣にはダリの2作品が並べられている。ガラは、ダリの10歳も年上の愛人であり後の妻であるが、腕組みをしてこちらを見つめる視線に「ワタシ」は「人物像」以上の関心をもち得なかった。そこに先ほどのキュレイターが巡回してくるのに出会わなければ。



彼は左手を顎にあててこすりながら、威厳を示すように声を低くして解説を始めた。「この『パン籠』の作品と『ガラ』という作品をよく見比べてください。どこか共通した所はありませんか。ガラの胸のはだけたところとパン、そして腕組みをしたところと籠。それらの部分を頭の中で重ね合わせてみてください。どうです？ そうなんです。こ

のパン箆はガラの手腕であり、パンは彼女に抱かれるダリ自身の化身なのです。さらに言えば、彼女の胸は母性の象徴となって、マリアを表し、パンはキリストだと見ることも可能です。ガラはダリにとってマリアのように慕われる存在であり、ダリは母性コンプレックスが強かったのでしょうか…」聞き入っていた入館者から溜息が漏れ聞こえた。「ワタシ」も腕を抱えてしまった。

芸術作品の意味性は、モノの形態との文法的な関係から造形的なうごめきへ、そして輻輳した個性へと姿を変え、読み解きの造形装置としての芸術表現も変化していったことを了解した。時代とともに芸術作品は普遍性から個人性へと「読み」の方程式を変えてきた。しかし、だからといって見るものを眩惑させるような芸術作品の光彩が失われることはないし、むしろ「見る」楽しみを倍加しているのである。

仮想美術館のギフトショップでふと「子どもの絵の読み取り」という本が目についた。そういえば学校の教師をする「ワタシ」の知り合いから子どもの絵は難しいよということを知ったことがある。子どもの絵を「読む」という言葉は子どもの絵が「読めない」もの、もしくは読むことが困難なものであることを示唆している。しかし、だからといって子どもの絵を読む価値のないものとして認識している人は少ないだろう。しかし、「ワタシ」の4歳になる子どもが描いた絵のことが思い起こされた。なかなか子どもらしくておもしろい絵で、小さな紙には鼻たれ小僧のような息子が髪の毛を逆立てて食事でもしているような絵が描かれていた。しかし、事実是这样であった。「ピーちゃんをねらって野良猫が来たので、こわかったけど守ってあげたよ。」大人の「ワタシ」の眼には絵の見かけだけにとらわれて、彼の経験の実体に迫ることはできなかったのである。「子どもらしさ」という言葉によって自分の無知をすりかえているような気がした。近代から芸術表現が芸術家個々のコードをはらむようになったように、子ども一人ひとりの絵の中に彼らの心の機微や論理が存在している。子ども一人ひとりとのかかわりの中で、とりわけ「読まれる」ことで絵は成長し、息づき、また風化していく。子どもの表現は、見ることと読むことの間数として様々な軌跡を描いているのにちがいない。

仮想美術館を出て、階段を少し下りたところで腰を下ろした。風が通りを伝っていくのが見えた。しばらくして「ワタシ」も通りの人混みにまぎれていった。

